

人を繋ぐけん玉

佐藤萌 濱田真優

KENDAMA が故郷東北に帰ってきた。東北から、再び大きくなって放たれた。

2014年、IT企業 Yahoo! JAPAN とアパレルブランド BEAMS が共同し、けん玉を通じた東北の復興支援プロジェクトをスタートさせた。プロジェクトの名前は KENDAMA TOHOKU。遊び心と人間としての面白味を求める BEAMS 創造研究所によって選ばれた東京のクリエイターと、被災地のミシン工房や染物屋さん、山形県にある日本最大のけん玉工場が連携した。日本に今までなかった粋なデザインのけん玉とけん玉関連の雑貨が生まれ、それらの商品は全て Yahoo! JAPAN でネットショッピングできる仕組みだ。

「プロジェクトの話をもらったとき、即答しました。それ面白いですね、やります、と」

KENDAMA TOHOKU のクリエイターの一人河本伸明さんは話す。プロジェクトに参加したけん玉工場のオフィシャルプレイヤーも務める彼は、原宿にあるストリート系アパレルショップのオーナーだ。店内で様々な種類のけん玉の販売も行い、ファッショナブルな色や模様の施されたけん玉を手に、アクロバティックな連続技でけん玉を魅せる。現代の「かっこいい」けん玉カルチャーを先導している存在だ。本プロジェクトでもけん玉のデザインに留まらず、パフォーマンスやイベントなどを主体となって企画した。ここ一、二年、アメリカからの逆輸入の影響もあり、けん玉は KENDAMA となって流行に機敏な一部の若者の間で広まっている。しかしけん玉はやはり日本のもので、メイドインジャパンのけん玉の良さを伝えたい、と彼は言う。情報拡散においては日本一の Yahoo! JAPAN と、ファッションだけではなくカルチャーをも引っ張る存在である BEAMS とのコラボレーションは、日本のけん玉を外に知らしめる意味でまさに最高の相手だった。

KENDAMA TOHOKU の土台となっているのは、「復興デパートメント」という 2011年12月から Yahoo! JAPAN が運営するプロジェクトだ。プロジェクトの本部は宮城県石巻市にある。現地の生産者や復興支援をする若者たちの声を聞き、生の情報を伝えながら東北ならではの特産品や雑貨を販売している。中でも伝統工芸や手仕事によって生まれたものにフォーカスした活動があり、その一環として KENDAMA TOHOKU が立ち上がった。

「複数の地域を巻き込み、カルチャーにスポットをあてたことでおもしろい化学反応のようなものが生まれました」

Yahoo! JAPAN の長谷川琢也さんはプロジェクトを振り返る。今年のゴールデンウィークには、「できるだけ多くの人にけん玉を触ってもらう」をテーマに東京各地でイベントが開催され、お年寄りから子どもまでが参加し、みんなで楽しくけん玉で元気になるという目的に近づくことができた。KENDAMA TOHOKU によって、けん玉は東北という生産元から再び発信され、都会で若者が作り上げたブームとも絡み合い、老若男女が楽しめる、より大きなカルチャーに発展していった。おじいさんおばあさんや子どもと若者。被災地と東京。カンカン、という東北の木の響きに乗って、遠かったものが繋がった。震

災、復興というイメージではなく、楽しい、おもしろいという入り口が、東北援助や東北にも思いを馳せることに続いている。

継続的に続けていきたい。

KENDAMA TOHOKU に関わった人たちは口を揃える。カルチャーの持つ力は偉大だ。

【編集後記】

一年前に、けん玉がストリートけん玉として人気を集めてきた、という記事を書いたから、随分けん玉カルチャーの状況が変わったように思います。夏には海外のプレイヤーを日本に招き、けん玉ワールドカップが開かれました。今後けん玉カルチャーがどのような方向に向かっていくのか、引き続き見守ると同時に、私もけん玉を通じて様々な人と笑い合いたいと思います。最後に、取材に協力してくださった BEAMS 創造研究所の南馬越一義さん、Yohoo! JAPAN の八木田愛美さん、そして河本伸明さんに改めてお礼申し上げます。

佐藤萌

この記事は、私がこの英字新聞サークルの一員となってから初めての記事です。この記事制作に関わった全ての人、そして特に共同著者の佐藤萌さんに感謝の気持ちでいっぱいです。

けん玉という全世代を虜にするカルチャーの素晴らしさを、再認識することが出来ました。また復興支援の幅を大きく広げたと思います。カルチャーがもつ可能性をこれからも期待しています。

濱田真優